



私も京都外大図書館を応援します(8)

「多くの人たちが図書館に足を運びたくなるようなシステムを」

「ニューライブ」のシステム開発者

岡山 修さん



「最近は仏像を追いかけています」。「え(？)、仏像ですか」と、問い直したが答えは同じである。本学図書館が利用者の皆さんに使って頂いているコンピュータのトータル・システム「ニューライブ」をたった一人で開発された方である。このシステムを作られた15年前はご家族と共に奈良県の山里に居を構え、ソフト開発の傍ら野菜作りをされているように伺い、最先端の図書館システム作りと野菜作りの関係に驚いた覚えがある。「いろいろな野菜に無農薬・有機栽培で挑戦しましたが、なかなかうまくいきません。収穫が少ない中でも、採りたてのキュウリやトマトの味は最高でした。季節感が薄い都会で育った私には、季節や自然を感じて暮らすことがとても新鮮で楽しかったのです。」

その頃は、有名な書店のコンピュータ部門に所属されており、会社に出勤しなくてよい所謂、自宅勤務でソフトを開発して電話回線を使って自社や提供先へ送られていた。「田舎暮らしで新緑の美しさ、満天の星空、飛び交う虫。狐や狸、ウサギなども出会い、アナグマを捕まえたこともありました。そんな中で人間も自然の一部でなければならないと感じています。」この考えが、利用者に優しいシステムを生んだのだろう。現在はコンピュータ部門が独立して新しい会社になったが、勤務体系は変わっていないそうである。

本学図書館がこのシステムを導入したのは、12年前の平成7年(1995)年である。導入前の折衝で、「外国語大学で特殊文字の処理が出来ないならば必要ない」とのこちらの姿勢に、「作ってきま」と簡単に言われたのを思い出す。「特殊文字は難題でした。コンピュータにない文字を取り扱わなければならないわけですから。結局、エミュレータ開発会社の協力を得て作りあげました。」その頃、アラビア語やペルシャ語を処理できる図書館システムは多くなく、容易に出来るものではないと思っていたのが見事に実現したのである。

他大学図書館の例を見れば、コンピュータ・システムは10年も経てば図書館界の変化から機能が古くなり、大きな金額をかけてシステムの入替えるのが当然と考えられてきた。本学図書館の「ニューライブ」は、10年を過ぎても環境の変化に対応が可能で、次々と新しいソフトを付加してきた。最近も利用者がインターネット上で申し込み、図書館から自動的に回答を送れる貸出の予約システム「My Library」を開発されるなど、利便性はさらに高まっている。「これからも図書館をサポートできるシステムであり続けたいのです。利用者が大切な本と出会うための手助けをできるように、より多くの利用者が図書館に足を運びたくなるように。それを念頭に今後の開発を続けたいと思います。」時々、打合せで本学図書館にお越しになる姿は十数年前と変わらず若々しい。変わったことは「仏像研究」という崇高な趣味からか、「ニューライブ」の持つ「優しさ」の機能が著しく向上したこととご自身の柔らかな笑顔が増したことが。

(聞き手・文) 奥 正敬